

性的マイノリティーの職業観

—米国でのインタビューの結果と日本での調査に向けての考察—

フロリダ州立大学 上野康司

1. 目的

社会に異性愛規範 (heteronormativity) が根強く残るにもかかわらず、多くの性的マイノリティーの若者が、将来の就職・就労について、不利を被ることがないであろうと考えていることが、米国の研究で報告されている。この結果には二つの解釈があり、一つは、性的マイノリティーの立場が近年、向上したとうこと。もう一つは、性的マイノリティーが、その立場ではなく、自分自身が人生の決定しているという信念を持ち続けるため、認知的な防衛をしている、とするものである。本研究では、性的マイノリティーの若者がどのようにして、このような楽観的な職業観を持つようになるのか、「語り」(personal narrative)という観点から探った。

2. 方法

アメリカ南西部の都市で、性的マイノリティーの若者を対象にインタビューを行った(N=34)。

3. 結果

彼らが将来の就職・就労において、不利を被ることがないであろうと考えるには、次の四つの理由があった。

1. 自分が典型的な性的マイノリティーではないため、差別を受けない、と考える。
2. 既に自分が性的マイノリティーであることを考慮し、職業選択したにもかかわらず、性指向が選択を制限したことを認識していない。
3. 将来就く職業が性指向と無関係である、と主張する。
4. 将来の就職・就労全般について、楽観的な考えを持っている。

参加者の中には、性的マイノリティーであることが、利点になると、考える者もいた。その理由は次の三つがあった。

1. 性的マイノリティーであることが、職業意識を高める、と考える。
2. 雇用者が性的マイノリティーを差別するのではなく、むしろ好意的であろうと予測する。
3. 性的マイノリティーとして特別な能力・技術が備わっていると考える。

4. 結論

性的マイノリティーが将来の職業計画を立てるうえで、その立場が不利にならないと考えても、それは彼らの主観であり、語りの構築という、概念から解釈されるべきである。この語りには、努力すれば、生い立ちに関係なく成功できるという、「アメリカン・ドリーム」の文化的価値観と、社会における性の多様性は否定されるのではなく、祝福されるべきだという近年アメリカで顕著な談話(discourse)に基づいている。このような基盤のない日本では、性的マイノリティーの若者の職業観は悲観的であると予想される。

文献

Ueno, Koji, Abraham E. Pena-Talamantes, Teresa A. Roach, Amanda N. Nix, and Lacey J. Ritter. 2018. "Sexuality-Free Careers? Sexual Minority Young Adults' Perceived Lack of Labor Market Disadvantages." *Social Problems*. (<https://doi.org/10.1093/socpro/spx014>.)